

平成 22 年 6 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520279

研究課題名（和文） 『元朝秘史』研究における文学研究の構築
—モンゴル英雄叙事詩研究を土台として—研究課題名（英文） The Secret History of the Mongols as a literary work
—Based on the study of the Heroic epics of the Mongols—

研究代表者

藤井 麻湖（真湖）

愛知淑徳大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：90410828

研究成果の概要（和文）：

本研究課題の対象である『元朝秘史』はチンギス・カンの祖先、チンギス・カンその人、そして後継者オゴタイの治世を描いた歴史文学作品である。我が国においては世界をリードするような研究がおこなわれてきたが、それらは歴史的・言語学的領域に留まってきたといえ、文学的領域においてはさしたる業績がない。本研究は、我が国における『元朝秘史』の文学の土台を構築することを目的としている。

研究成果の概要（英文）：

“The Secret History of the Mongols” is a work of historical literature which describes the pedigree of Činggis Qan(Genghis Khan) and the lives and the reigns of Činggis Qan himself and his successor Ögödei. Though there have been many excellent and leading studies of the Book in Japan, the most of them are placing emphasis on historical and linguistic aspects. My attempt is to study the Book from literary point of view and to give a structural analysis of the Book as a literature.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,000,000 円	0 円	1,000,000 円
2007 年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
2008 年度	600,000 円	180,000 円	780,000 円
2009 年度	800,000 円	240,000 円	1,040,000 円
年度			
総計	3,300,000 円	690,000 円	3,990,000 円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：元朝秘史、英雄叙事詩、二重の意味構造、モンゴル、構造分析、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、代表者のモンゴル英雄叙事詩研究の実績を踏まえ、『元朝秘史』（以下、秘史）を1. 登場人物関係、2. 系譜、3. 時間、4. 地名の4つの観点、とくに1と2の観点から考察をすすめるというのが当初の予定であった。その背景には、中国内蒙古自治区

のフフホト市でおこなわれた中国蒙古学国際学術討論会（平成 17 年度）で発表した系譜理解すなわちバーリンという明示的レベルにおいては重要度の低い氏族が、非明示的にはチンギス・カンの属するボルジギン氏よりも優位におく意図があることが判明したからである。このことは研究代表者のこれま

でのモンゴル英雄叙事詩研究における“二重の意味構造”研究に密接に連なるものであると予想された。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究代表者のモンゴル英雄叙事詩研究を延長上に展開するもので、モンゴル民族の古典かつ最古の英雄叙事詩である秘史における主人公チンギス・カンは見かけ上は賞賛されているが、非明示的レベルにおいてはそうではない可能性を構造的に示すことである。

3. 研究の方法

上記1. で記した秘史の系譜に関わる部分を見直した結果、結論以外の証明のプロセスに重大な欠陥が判明したことにより、当初の計画（上記1. で記した4つの観点からの研究）を大きく軌道修正せざるをえなくなった。しかし、発表論文③における伝説研究においてチンギス・カンによって滅ぼされたタタルという集団の重要性が浮かびあがったことを機に、チンギス・カンの庶弟ベルグテイの母をタタル出身者と仮定するというアブダクションという方法によって、秘史の解明を進めていくことになった。なお、この一連の研究には、多分に下記の[図書]で記した論文の方法論であるジェンダー論的視点も加味している。

4. 研究成果

本研究の成果の中核部分は、以下(1)～(3)の3つの論文である。それゆえ、3つの論文の要約を以下にまとめることとする。3つの論文とは、

(1) 昨年の成果論文である「チンギス・カンをめぐる伝説の諸相—『チンギス・カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに—」(現在言語文化学会に投稿中)

(2) 2009年12月6日に行なわれた言語文化学会での発表をまとめた当該学会論集に投稿中の「『元朝秘史』第53節～第68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに—」

(3) 2010年6月6日に行われた日本口承文芸学会において発表した愛知淑徳大学現代社会研究科の論集の「『元朝秘史』第268節におけるイエスイ妃に関する叙述—グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈—」

まず、(1)は、2002年にモンゴル国で出版されたN. ナムスライ氏の編集した小冊子(以下N本)におさめられた42編のチンギス・カン関係の伝説をもとにその諸相を論じたものである。ここで明らかになったことは次の5点に要約できる。①伝説がときに旧ソ

連批判の色合いをもつ戦時的言説となっていること、②チンギスの生誕地をダダル村に求める編者の意図が存在すること、③伝説に現れる地名が変化することがあること、④伝説のもととなる自然や遺物が変化することがあること、⑤伝説の古層として抽出しうるのが、チンギス個人よりもチンギスと愛憎入り混じる人物に着目したときに現れること、とくにチンギスと婚姻関係を結びながらも敵対関係にあったタタル集団の存在が徐々に立ち現われてくること、である。

本論文の特徴は、チンギス・カンに関連する伝説群研究と秘史研究を接合させる試みにある。現実の生活世界に伝承されている伝説を文献的にしか残っていない秘史研究につなげるには、それなりの鋭い伝説の分析が要される。本論文で対象にした伝説は、よく観察すると、最近の6, 70年間に変容したのもも多く、伝説は古いものであるイメージがあるものの、実際にはそうではないことがある。この事実は、なぜ伝説を語り継ぐのかという、語る人のモチベーションに注意を向けさせることになる。語ることのモチベーションというものに思い至ったとき、伝説は重層的なものであり、秘史研究に利用できるような古層に達するには、現代的な語りのモチベーションの被膜—とくに旧ソ連のモンゴル文化遺産への介入に対する批判—を取り除く必要があることが理解されてくるのである。こうした被膜を取り去った後に、上記の⑤という秘史研究へリンクする古層を考察する条件がととのうわけである。⑤の古層は本研究成果の土台を構成するものとなったので、以下、本論文から当該部分を抜粋しておきたい(52-54頁)。

N本で興味深いことは、チンギスを対象としながらも、むしろチンギス以外の人々の名前を考察することによって、この地域の伝説の古層なるものを引き出すことができるように思われることである。

伝説に出てくる登場人物のなかでも目を引く人物として、①チンギスの庶弟ベルグテイ、②ベルグテイの兄ベクテル、③イエスイ后、そして④フフチュ(秘史ではククチュ)が挙げられる。②のベクテルは幼少の頃、チンギスとその同母弟ハサルに殺害されており、チンギス伝説としてはダーティーな側面を示すため、意味深いように思われる。そして、③のこのベクテルの弟ベルグテイの登場する伝説は3編あり、チンギス以外の登場人物としては事例が多い。つまり、この地域は、ベクテル・ベルグテイ兄弟にゆかりのある地域である可能性をうかがわせている。

たしかに、『元史』巻117列伝第4によれば、ベルグテイはモンゴルから3千戸、広寧路、恩州2城戸1万1603をチンギスから賜ったほかに、オノン河やケルレン河の地に营地をもっていたとあるので、ベルグテイの子孫は内蒙古に多いと考えられるものの、ダダル付近にもいることが推測されるのである。ベルグテイの伝説のひとつ(35)は全文を既に紹介したが、残る2編は(22)、(36)である。(22)を紹介しよう(ここでは省略)。

この伝説でビレクトと呼ばれる相撲取りはベルグテイに対応すると思われる。ただし、秘史にはこうしたエピソードは存在しない。いずれにしても、ベルグテイは兄のチンギスをよく助けてモンゴル帝国の建設に貢献したことは知られている。(36)は、ビルグーテイ勇者が西方に遠征に行く際に残した百人の兵士たちが1人ずつ1本の軍旗をはためかし、晩にはたくさんの火を焚いていたので、その場所をゾーン・モド(百の木)というようになったという話である。ところで、前述の(35)で登場するベルグテイに対応すると思われるビルグーテイ勇者が征西に行ってもどらなかったとあるが、これは史実ではないようである。なぜこういうことになったのかは不明であるが、これはチンギスとベルグテイの間の複雑な関係を想起させる内容となっている。秘史においてベルグテイは度々登場し、秘史の中で有名なのは、巻4の§131においてオノン河の酒宴でジュルキン族のブリ・ボコに肩を太刀で切りつけられる話である。この話は秘史の巻1§50、巻4§136にも言及されるエピソードである。最終的に巻4§140でベルグテイはブリ・ボコと相撲をとり、ブリ・ボコの背骨を折って死に至らしめている。ここで重要だと思われるのは、巻4§136をみると、ジュルキン族のブリ・ボコが殺される背景には、ベルグテイとの対立もあるが、彼らがチンギスのタタル部族への戦闘に非協力的であったことが大きく関係している。ジュルキン族はチンギス・ハーンの系譜的にみて同族的存在である。にも関わらず彼らがチンギスの不倶戴天の敵であるタタル征伐へ参加しないことは、チンギスには許しがたい背信行為と映ったのであろう。タタル族がチンギスの不倶戴天の敵であったのは、チンギスの父イエスゲイがタタルに毒殺されたからである。

ただし、ここでモンゴルとタタルの関係は決して単純なものではないことにも注意が必要であろう。タタル部族は、チンギスの父イエスゲイを毒殺したという点では不倶戴天の敵であったが、チンギス時代もそれ以降

も、モンゴル部族はタタル部族とは婚姻関係も多く結んでいたことが、モンゴル帝国成立前後の事情を語る重要な資料のひとつである『集史』(漢語訳『史集』)のタタル部族の項に見えている。つまり、両者の関係は決して単なる敵対関係といった単純なものではなく、対立しながらも共存していた集団であったといえるのである。

次に注目したいのは、③のイエスイ后である。伝説においては前述のように、たった一度しか登場しないが、そうした偶然のような出現が実際には決して偶然ではない可能性がある。その理由は、イエスイ后が今述べたタタルの出身者だからである。イエスイ妃は、イエスゲンとともにタタル出身の姉妹でチンギスの妃となった人物である。イエスイ妃は、タタルがチンギスによって滅ぼされたあとチンギスの妃になっている。この経緯は秘史の巻5§155に記されている。続く§156においてイエスイはタタル潰走の混乱のなかでチンギス陣営にもぐりこんだ自分の夫をチンギスに見破られ殺されている。イエスイの夫に対するチンギスの処遇を考えると、イエスイ妃は、チンギスの弟ベルグテイと運命的に似通っていることが判明する。

前述のように、チンギスの庶弟ベルグテイは、兄ベクテルをチンギスとその同母弟ハサルに幼少の頃に殺されているからである。つまり、ベルグテイとイエスイは、チンギスとの関係において微妙にならざるを得ない人生の経緯を共有しているといえる。このような観点から見たときに、タタル部族殲滅の際にベルグテイが犯した「過ち」は新しい意味を帯びることになる。ベルグテイは、タタルを殲滅した後にその捕虜たちをどうするかの評定において、タタル族のうち車のこしきと比べてその高さまで成長している男子をすべて殺害することに決めたことをイエケ・チェレンというタタルの領袖のひとりにその決定を漏らしてしまう。この決定が漏洩したためにタタル族は最後の抵抗として懐に忍ばせた太刀で多くのモンゴル兵士を死出の道連れにしたとあり、この損害によりチンギスはベルグテイが以後、評定に加わることを禁じたことが秘史に綴られている。

ベルグテイが漏洩した相手のタタルの領袖イエケ・チェレンは、イエスイの父であり、ベルグテイの機密漏洩の話はチンギスがイエスイ妃を娶る§155のすぐ手前の§154に展開されている。すなわちベルグテイに関する事柄は、よく見ると、イエスイ妃の叙述と近接して叙述されているだけでなく、密接に関連していることが判明する。これを偶然で

はないとすると、その背景について検討することは意味があろう。この場合、チンギスの父イエスゲイが娶っていたベルグテイの母の出身は不詳なのであるが、この出身をタタルだったと仮定すれば、話の辻褃がいろいろ合うことは確かである。モンゴルとタタルの関係からいえば、タタル部族から捕虜として連れてきた女性であったとしても、不思議ではない。実際、秘史巻1 § 59においてチンギスがホエルン母から生まれるときに幼名をテムジンと名付けられたのは、イエスゲイがタタル部族との闘いでテムジン・ウゲなる捕虜をちょうど連れてきたところであったからだと説明されている。ベルグテイの母がタタル出身であるなら、ベルグテイがイエスイ妃の父であるタタル部のイェケ・チェレンに機密を漏洩した行為は、ベルグテイの真意はさておき結果的に、チンギスに単なる過ち以上の意味を与えてしまったことは充分ありえることであろう。

タタルという観点からみれば、チンギスよりも前の時代のクトラ・カンの推戴の場所についての(40)もまた関連が出てくることは興味深い。クトラは前任者のアンバガイ・カンがタタル族の裏切りによって金朝に捉えられ処刑された後に王位に就く人物であり、就任後、タタル族との闘いに明け暮れたことが秘史巻1 § 57に叙述されている。以上のように、①～③の人物は実際のところタタルに関連していることが観察されることは興味深いことである(以下省略)。

ベルグテイの母の出身がタタルではないかという仮説をさらに展開したのが、(2)の論文である。ここではとくに秘史の第53節～第68節を対象に考察をおこなった。これは、チンギスの父イエスゲイ・バートル(以下、イエスゲイ)時代全般にわたる部分(有名なエピソードとしてはチンギスの母となるホエルンの略奪とイエスゲイ自身のタタル族による毒殺死がある)である。考察では、この部分における4つの疑問点を挙げ、このうち3つの疑問点がベルグテイの母の出身をタタル族と考えた場合に理解されるものとなることを提示した。その4つの疑問点は、次のようなものである。

1) 第53節でアムバガイはなぜ自分の子供に直接ではなく、先帝の息子のクトゥラに、自分の息子に伝言させる迂回したやり方を取ったのかということ。

2) 第61節でイエスゲイはメルキト部族からホエルンを略奪したにも関わらず、妻の実家に息子テムジンの嫁を探しに行くことと述べられていること。

3) 第67節でイエスゲイはタタル部族と敵対関係にあるにも関わらず、のどが乾いたからといってタタル部族の宴会に下馬したのはなぜなのかということ。

4) 第68節でイエスゲイは遺言としてムンリクにテムジンを早急に連れてくるように依頼しているが、それはなぜなのかということ。

上記のうち1)以外は、ベルグテイの母、すなわちイエスゲイの正妻以外のもう一人の妻の出身をタタル族とすると解決する。ここでは、2)についての論考のみ提示しておく。まず、第53節から第54節に至る流れであるが、一見、第53節のアムバガイ・カハンのタタル族の裏切りによる死は、第54節のイエスゲイがホエルンを略奪するという出来事と無関係に思われる。しかし、イエスゲイがホエルンを略奪する前にもう一人の妻をタタル族から既に娶っていたとするならば、2つの節は密接なる関連があることが判明する。

なぜならば、第53節でタイチウド族のアムバガイ・カハンがタタル族によって殺害されたということになると、タイチウド族はイエスゲイの属するモンゴルと同族集団であるので、タタル族はモンゴル族にとっても敵となる。その敵のタタル族からイエスゲイが第一夫人＝正妻を娶っていたとすると、イエスゲイの立場はタイチウド＝モンゴル連合政権において非常に苦しいものになったと推測される。

そんなわけで、イエスゲイは新たな夫人を探さねばならなくなったのではなかろうか。秘史には全く触れられていないが、第一夫人であるベルグテイの母は、いわゆる儀礼的に、すなわち正式に娶ったのであろうと考えられる。それゆえ、新たな夫人は儀礼的に、すなわち正式なる手続きで娶ることができなかった。そこで編み出された方法が“略奪”という方法ではなかったのかと理解される。

それだけではない。略奪は既に娶っていた正妻を第二夫人にするために必要な論理も提供したと考えられる。すなわち、略奪という方法を用いることにより、「実は娶るべき正妻は他者に奪われていたので、仕方なく別の女性を娶っていた」ということにしたのではないだろうか。それゆえ、イエスゲイのホエルン略奪は「正妻を奪い返す行為」として立ち現れてくるのである。というわけで、イエスゲイがホエルンを略奪することは必要不可欠であったということになるのである。

また、こうした事情があるからこそ、イエ

スゲイがテムジンをホエルンの実家から求めようとしたことが、何ら躊躇もなく叙述されているのだと考えられる。つまり、秘史には書かれてはいないが、ホエルンの実家もイエスゲイがホエルンを娶ることを承諾していたと考えることができる。

以上は、疑問点の②第 61 節でイエスゲイはメルキト部族からホエルンを略奪したにも関わらず、妻の実家に息子テムジンの嫁を探しに行くことと述べられていることに対する説明ということになる。つまり、イエスゲイのホエルン略奪は不法な行為ではなかったため、イエスゲイは自分の息子テムジンにも母と同じ部族から嫁を求めようとしたのである。それゆえ、イエスゲイが母と同じ部族から嫁を娶ることについて何ら躊躇の跡が秘史にみえないのは不思議ではないということになる。

ところで、第 57 節においてはタイチウド族のアムバガイの死後、モンゴル族のクトゥラがカハン（皇帝）になったことが語られている。この部分は、前述の第 53 節にすぐ後続してもよい内容であるが、そうはなっていない。すなわち、イエスゲイのホエルン略奪の内容が、實際上、第 53 節と第 57 節に挟まれていることになる。イエスゲイの変則的婚姻がここに挟まれている理由はやはり次のようなことと関係しているとみてよいのではなかろうか。つまり、イエスゲイは自分の正妻をタタル族からホンギラト族（その下位集団がイエスゲイの妻ホエルンの実家のオルクヌウト）に替えることにより当該時期の政局に対応しようとしたからであると推測される。

さいごの(3)の論文は、秘史巻 12 第 268 節の叙述のスタンスに隠されたアンチ・チンギス志向を、最後の遠征に同行したイエスイ妃（以下、イエ妃）についての秘史の叙述と、民間や年代記に伝わるグルベルジン・ゴア妃（以下、グル妃）の伝承の考察を平行かつ交叉させておこなうことを通して論じたものである。考察は以下のような手順でおこなった。

まず、秘史においてイエ妃に触れられる叙述箇所をすべて抜粋し、その叙述の流れを整理することを通して、秘史が非常に一貫した論理でイエ妃についての記述をおこなっていることを確認した。とくにここでは、イエ妃が前夫を殺された夫人であるという事実において、唯一後継者問題に立ち入る権限をもっている夫人であることを指摘した。次に、夫を殺された後にチンギスの妻となる点でイエ妃と境遇的に似通っている西夏のグル

妃が黄河に入水自殺をはかる伝承のひとつを紹介し、その伝承が“二重の意味構造”をもっていることを提示した。ここでは隠された非明示的意味がアンチ・チンギス的なものであることを指摘した。

さらに、グル妃の伝承が 17 世紀以降に著述された各種の年代記に記載されていることに言及し、その中から『蒙古源流』と著者不明の『アルタン・トブチ』の当該伝承箇所を抜粋し、それぞれ、“二重の意味構造”をもつ民間伝承との関係でどのようなことが言えるのかを考察した。ここでは年代記における当該伝承箇所には民間伝承ほど鮮明にアンチ・チンギス志向が認められないことを指摘した。

追加考察として、“二重の意味構造”が確認された民間伝承以外の諸民間伝承と『蒙古源流』や『アルタン・トブチ』以外の年代記を加えて、年代記の特徴、民間の伝承の特徴、さらに両者に共通する特徴を考察した。この考察の中で、グル妃の伝承の多様性が確認されたことと同時に、民間の伝承であるか年代記かを問わず、この伝承に共通するモチーフはグル妃が黄河に入水自殺することであり、また多くの場合、自殺の前にチンギスへの性的危害がなされているという事実を指摘した。

結論においては、グル妃の伝承を語り継ぐ人物として論理的かつ道義的にイエ妃が最も相応しいのではないかという仮説を提起した。そしてこの観点から、伝承の担い手としてのイエ妃の可能性、さらにはイエ妃その人が伝承の作者である可能性に言及しておいた。この可能性から見た場合、秘史の第 268 節におけるチンギス逝去の叙述の唐突さと簡略さは、明示的にはチンギスへの配慮であると読めるが、非明示的にはアンチ・チンギス志向を担保するためであったのではないかという見方を提示した。

以上の 3 論文は秘史におけるアンチ・チンギス思想を指摘するものである点で重要なものである。アンチ・チンギス思想の確認は、秘史における主人公チンギス・カンが見かけ上は賞賛されているが、非明示的レベルにおいてはそうではない可能性を構造的に示すことに確実に連なる研究である。この点で、当初の 4 つの観点からの考察は途中で断念せざるをえなかったものの、秘史研究の基盤をつくるという研究目的の最低ラインは達成されたものと考えられる。

今後もこの路線で秘史を考察することは充分可能であると考えられる。実際にこの路線で現在、新論文を執筆中であり、昨年度の

実績を踏まえた4本の論文がまとまりつつある。4本目の論文については、平成22年の9月初旬に予定されている国際学会（於中国・新疆大学）で口頭発表をするつもりである。また、現在、テキストの翻訳をも含めた、本研究課題を一冊の学術研究書として刊行する話を風響社出版と進めている。

最後に、本研究の重要な副産物として次のことを付け加えておきたい。それは、本研究において秘史においては脇役的存在である女性に注目したことにより、モンゴルの馬研究にリンクする側面をもっており、これまで馬を“非正妻=愛人”とみなす研究を発表してきた研究代表者の従来の研究にも関連付けることができることが判明したことである。

今後は、この副産物を2010年度より始まる研究課題『モンゴル伝承文化における馬の隠喩の解明—遊牧文化における馬の隠喩研究—』（基盤C：課題番号22520377）において接続させて研究をさらにヴァージョンアップさせていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①藤井真湖（無）

『元朝秘史』第268節におけるイエスイ妃に関する叙述—グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈—『愛知淑徳大学現代社会学科研究報告』第5号 2010年 18頁分（7月刊行）

②藤井真湖（無）「チンギス・カンをめぐる伝説の諸相—『チンギス・カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに—」『愛知淑徳大学現代社会学科研究報告』第4号 2009年 41—56頁

③藤井麻湖（無）「モンゴルの葬送儀礼」『万葉古代学研究所年報』第6号 2008年 195—213頁

④藤井麻湖（無）「英雄叙事詩『ジャンガル』における七沖の痕跡—ジャンガルが7歳のときに権力を掌握するモチーフについて—」『北東アジア研究』別冊第1号 2008年 187—226頁

⑤藤井麻湖（有）「謎々における馬—モンゴル英雄叙事詩の隠喩研究の補完として—」『言語文化学会論集』第27号 2006年 133—144頁

〔学会発表〕（計 6 件）

①藤井真湖 「『元朝秘史』におけるイエス

イ妃—グルベルジン・ゴア妃をめぐるチンギス・カン伝説との関連で」第34回日本口承文芸学会 2010年6月6日 於立正大学

②藤井真湖 「『元朝秘史』第53節～第68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに—」（モンゴル語での発表）2010年3月30日 於中国内蒙古社会科学院

③藤井真湖 「『元朝秘史』第53節～第68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに—」言語文化学会 2009年12月6日 於愛知淑徳大学

④Mako FUJII, Study of “Erkhii Mergen” (A Mongolian Myth), The 16th Congress of The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 2009/8/28, 雲南大学（中国）

⑤藤井真湖 「モンゴルの“射日神話”『エルヒー・メルゲン』—基本話に認められる“七沖”の観念とヴァリエントの検討」第32回日本口承文芸学会 2009年6月8日 於国学院大学

⑥Mako FUJII, Онъсого болон Тууль дахь морь, The 9th International Congress of Mongolists Debated to the 800th Anniversary of the Yeke Mongol Ulus 2006/8/7-13, The State University of Mongol.

〔図書〕（計 1 件）

①藤井真湖, 『死霊解脱物語聞書』の新解釈—ムラ共同体に挑む菊の闘いという物語として—, 『横断研究の試み ジェンダーの交差点』, 愛知淑徳大学ジェンダー女性学研究所編 彩流社, 225—261頁, 2009年

6. 研究組織

(1) 研究代表者：藤井 麻湖

（ 真湖 ）

愛知淑徳大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：90410828

(2) 研究分担者：なし

(3) 連携研究者：なし